

第99回読書会例会報告

2010年7月23日(金)

担当 佐藤隆子

課題本「介護保険は老いを守るか」 沖藤典子著岩波新書

暦(大暑)どおりの暑さにもかかわらず“老いを守る”という言葉に敏感な皆様19名の出席でした。

高齢者を社会全体で支えあおうという主旨で2000年4月に始まった介護保険というシステムが10年という節目をむかえました。この制度の審議会委員を務めた著者の目を見た其の変貌ぶりを豊富なデータ、経験に基づいてわかりやすく書いてあります。

沖藤氏のことばによれば「あんなにも輝いて見えた時代の寵児が、こんなにも冷ややかで紋切り型な朴念仁に変わってしまうとは！」と嘆いています。制度が出来て4年目に「介護給付適正化推進運動」が始まり、厳しく利用が制限されるようになりました。たとえば同居家族がいる場合は、生活援助(料理、掃除)は駄目、ヘルパーは病院の玄関まで、院内は医療保険の対象となるので付き添いが必要ならば自費になる。家に閉じこもりがちな老人が散歩の付き添いをたのんでも、散歩という目的ではだめ。買い物同行ならば可等杓子定規な規則ばかりです。

勿論財源の問題もありなにもかも介護保険を適用できないのはわかりますが、私自身利用者の家族として納得がいけないことが多々あります。

介護保険は40歳以上の国民が支払う保険料と公費(国、都道府県、市町村)が45%ずつ残りの10%を利用者が支払う制度です。このまま利用者が増加し続けると、保険料を上げざるをえなくなります。負担をふやさないでサービスを充実させる。この二つを両立させるのはなかなか困難です。

私の個人的な興味と関心で選択した本でしたが、参加者すべての協力で活発な会となりました。

最後は介護保険を離れ、老後の生活にはいくつになっても人の役にたとうというボランティア精神が大切で、この杉並三田会もその一端を担おうということで散会しました。